
優しく抱いて

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
優しく抱いて

【Nコード】
N0573H

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
真夜の誕生日。悠樹に欲しいその贈り物とは。愛こそが最も素晴らしい贈り物というお話です。

第一章

優しく抱いて

「もうすぐ誕生日だよね」

「ええ」

加賀美真夜は加藤悠樹の言葉に応えていた。

「そうね。これで十六回目の誕生日」

「早いよね」

悠樹はこう言って真夜の顔を見て笑う。その顔は女子高生、それも一年生にしては大人びていて中性的で女の子を思わせる顔の悠樹とは実に対称的である。真夜は背も高く男の子としては普通位の悠樹と比べても遜色ない程だ。セーラー服も何処か大人が着ているようである。

「気付けばもう十六なんてね」

「そうね」

真夜は大人びた声で彼に応えた。

「それで私達が付き合うようになって」

「一回目の記念日だよね」

「あの時は驚いたわ」

黒に少しだけ茶を混ぜたロングヘアの中で微笑んで笑う真夜だった。

「いきなり告白してきたから」

「あの時は勇気を奮ったんだよ」

悠樹は微笑んで彼女に述べた。微笑むその顔は童顔でもあり小さい女の子を思わせる邪気のないものだ。少し伸ばした茶色の髪が綺麗である。

「もうどうなってもいいって思ってね」

「大袈裟ね」

その声も大人びたものだった。

「それって」

「本当に必死だったんだよ」

彼は言うのだった。

「死んでもいい、行つてやるって思つてね」

「そこまで思つていたの」

「本気でさ」

二人は今川の土手のところにいる。土手は草原になっていてそこに制服姿で並んで座っている。悠樹の制服は詰襟でありそれだけ見れば確かに男だとわかる。

「振られたらこの川に飛び込んで死ぬつもりだったんだよ」

「私が悠樹君を振ったら？」

「うん」

また答えたのだった。

「その時はね」

「飛び込まなくてよかったわね」

真夜は彼の今の言葉を聞いて本当にそう思ったのだった。

「飛び込んでいたらそれこそ大変なことになっていたわよ」

「だから死ぬつもりだったんだ」

このことがまた言葉に出る。

「本気でね」

「けれどそうはならなかったね」

「真夜さんが告白受けてくれたからね」

「断る筈ないわ」

真夜は言った。

「それはね。絶対になかったわ」

「何で？」

「好きだったからよ」

真夜は川を見ていた。二人並んでその土手の前にある川を見ながら話していた。真夜の目は何処かこの世界ではないものを見ているかのようにだった。

「だから。断らなかったのよ」

「僕が好きだったから」

「今だから言えるけれど」

その琥珀色で何処か別の世界を見ているような目でまた彼に語る。

「好きだったの。告白されて嬉しかったわ」

「そうだったんだ」

「とてもね。だからこうして同じ高校にも行って」

「うん」

「今もこうしてここにいるの」

こう彼に話すのだった。

「そういうことなのよ」

「成績が同じ位でよかったよ」

実は二人の通っている高校はレベルはそれ程低くはない。わりかし高い方である。悠樹はそこに二人一緒に入ることができたことを幸福に思っているのである。

「本当にね」

「おかげでこうして高校も一緒に」

「今。付き合うようになって一年になって」

悠樹はそのことをこの上ない幸せに思いながらそのうえでまた語る。

「それだけで満足だよ」

「そこまで思ってくれてるの」

「うん。それでね」

彼はここで真夜に顔を向けて言ってきた。

「真夜ちゃんのお誕生日だけれど」

「ええ」

「プレゼント。何がいいの？」

こう彼女自身に問うのだった。

「プレゼント。何がいいのかな」

「何かなのね」

「うん。何がいいの？」

また彼女に問う。

「何でも言っても。僕何でもプレゼントするから」

「そうね」

真夜は少し話すのを止めた。そうして暫く時間を置いてから彼に
対して言うのだった。

第二章

「それだったら」

「うん。それだったら」

「心が欲しいわ」

「こう言うのだった。」

「心が」

「心!？」

「ええ、そうよ」

静かに悠樹に告げた。

「心が欲しいの」

「心って」

真夜の言葉を聞いて首を傾げる悠樹だった。

「何なの、それって」

「悠樹君の心よ」

「僕の心って」

「こう言われてもまだわからなかったのだった。」

「何なの、本当に」

「わかってくれたら送って」

真夜はまた彼に言ってきた。

「お誕生日にね」

「心ね」

首を捻りながら呟いた。

「僕の心って」

「それだけでいいから」

また真夜は言ってきた。

「私はね」

「わからないけれどわかったよ」

要領を得ない悠樹の返答だった。

「それじゃあ。心よね」

「ええ」

また悠樹の言葉に応えるのだった。

「わかつてくれたらね。誕生日にね」

「さつきも言っただけどわからないけれどわかったよ」

またこの言葉を出したのだった。

「それじゃあね」

「ええ、楽しみにしてるわ」

微笑んで悠樹に告げたのだった。とりあえずこの話はこれで終わった。しかしそれはこの話が終わっただけで本格的なしまりに過ぎなかった。例えて言うのならオペラの序曲が終わったところだった。話を終えた悠樹は真夜と別れた後であれこれと悩むのだった。とりあえず家に帰った。家に帰ると大学に通う為に同居している従姉の奈々がいた。彼女はリビングでゲームをしながらビールを飲んでいた。

「おかえり」

「あつ、おかえり」

ビールを飲みながら悠樹に応えて挨拶してきた。ジーンズにシャツのラフな格好である。如何にも部屋の中でくつろいでいるという感じであった。

「どうしたの？浮かない顔して」

「ちょっとね」

こう従姉に言葉を返した。

「考えることがあつてね」

「考えることね」

「奈々姉ちゃんも彼氏いるよね」

「いるよ」

ゲームをしながら率直に述べてきた。

「当たり前じゃない」

「当たり前なの？」

「美人には常に彼氏がいるものよ」

ラテン系のようにメリハリのはっきりした顔で答えてきた。唇は真っ赤で黒い髪をかなり長く伸ばし後ろで束ねている。その顔で答えてきたのだ。

「それも性格美人にはね」

「姉ちゃんって美人だったんだ」

しかし悠樹は今の言葉にはかなり懐疑的であった。

「それも性格美人だったんだね」

「そうよ」

また彼の言葉に答えてきた。

「知らなかったの？」

「今はじめて聞いたよ」

随分なやり取りだった。

「そんなこと」

「聞くまでもなく気付くものなのよ」

しかし奈々はこう従弟に返すのだった。

「言われなくてもね」

「そういうものなの？」

「そういうものよ」

また言葉を返す奈々だった。

「鋭い男じゃなきゃ駄目よ」

「そうなの」

「女の子にもてないわよ」

今度はこんなことを言ってきた。

「わかる？そこところ」

「それはちよつと」

奈々の言葉にも首を捻るばかりであった。

「まだよくわからないな」

「少なくともよ」

奈々は言葉を続けてきた。

「わからないと駄目よ」

「女の子のことが？」

「そういうこと。最低言葉の意味はね」

ゲーム画面に顔を移しての言葉だった。

「わからないとどうしようもないわよ」

「そういうものなんだ」

「それでよ」

奈々はここまで話したうえで話題を変えてきた。

「何があつたの？」

「うん、ちよつとね」

「ちよつとじゃわからないでしょ？」

完全に奈々のペースになっていた。悠樹は彼女に言われるまま彼女の問いに応える形になっていた。やはり相手が従姉では分が悪かった。

第三章

「それで何があったのよ」

「うん、実はね」

「はい、実は」

「ちよつと聞きたいことがあるんだ」

真夜のことはあえて隠すことにしたのだった。彼女のことを言えばまたどういったふうにかかわれるかわからなかったからだ。そうなってしまうえば彼女の言葉の意味を探ることもできないからだ。

「ちよつとね」

「ちよつとつて何がどうなったのよ」

「奈々姉ちゃんつてさ」

オブラートに包んで尋ねることにしたのだった。

「欲しいものつてある？」

「一杯あり過ぎて困らないわ」

こう来た。

「バッグも欲しいし車も欲しいしテレビも欲しいしマニキュアも欲しいしサングラスも欲しいしアイシャドーも欲しいし携帯も欲しいしもう何でもね」

「そんなの欲しいものあるの」

「美人は欲張りなのよ」

しかもまた自分を美人だと断言してみせる。

「だからよ」

「悪いけれどそれじゃあ参考にならないよ」

悠樹も言うことは言う。鞆は床に置いてそのうえで彼女の近くにある小さなソファアの席に座った。そのうえで話を続けるのだった。

「そんなのじゃ」

「あら、贅沢なこと言うわね」

奈々は彼の今の言葉を聞いてまた言い返してきた。

「折角教えてあげたのに」

「今ので教えてラの？」

「そうよ。教えてあげたのよ」

あくまでこう言う奈々だった。

「これでわからないのね」

「わかるわけないじゃない。大体姉ちゃんにアドバイスは求めてるけれど姉ちゃんのことじゃないよ」

「何だ、そうだったの」

わかっていないようだったが実はわかっている奈々だった。しかしそれはあえて言わないのだった。この辺り楽しんでいるのがわかる。

「まあとにかくよ」

「うん」

「欲しいものよね」

やっとここでまともな話になるのだった。

「それね」

「うん、それだけれど」

「それならもう簡単よ」

話を聞いてこう言うのだった。

「話はね。簡単よ」

「簡単なんだ」

「真心よ」

今度はこんなことを悠樹に言う奈々だった。

「真心。わかる？」

「真心って」

話を聞いていて真夜と同じことを言うと思った。それはあえて言わないがそれでもだった。

「それなんだ」

「お金はね。いるけれどいらないの」

「いるけれどいらないの」

「お金でものは変えても心は変えないわよ」

ここでまたビールを一杯やってそのうえでもう一缶空けた。見ればもう三五〇のビールを三缶程度開けていた。結構飲んでいた。

「心はね」

「よく言われることだよ」

「そうよ。だってその通りだから」

だというのだった。

「心が一番大事なのよ」

「心が」

「それがあつたらはつきり言ってお金はいららないわよ」

先程までとはうつて変わってえらく真剣な言葉になっていた。それでもゲームとビールはやめずそのまま続けてはいた。それでも言葉は違っていたのだ。

「とにかくよ。心よ」

「まずは心なんだ」

「それが一杯なら」

そしてまた言うのだった。

「お金なんていらないわ。かえって邪魔かしらね」

「邪魔って」

「だから。心さえあれば本当にいらないのよ」

このことを念押しさえしたのだった。随分と真面目な面持ちにさえなっている。

「それ、覚えておくことね」

「心さえあればなんだ」

「逆に言えばよ」

今度はこんなふうに言葉を変えてきた。

「幾らお金があっても心がなかったら何の意味もないわ」

「何も」

「そう、何もね」

こつも言い加えてきた。その間悠樹はテーブルの席に座ってじっ

と話を聞いていた。彼はただ話を聞いて頷くだけだった。

「意味ないわよ。女の子はね」

「女の子は？」

「見てるわよ」

「見てるんだ」

「そうよ。何でもね」

言葉が鋭いものになってきていた。ビールを飲みながらもだ。

「見てるわよ。若し心がなかったら」

「どうなるの？」

「終わりよ」

一言で言い捨てたのだった。

「それでね。何もかも終わりなのよ」

「終わりなんだ」

「そう、何もかも終わりよ」

また言う奈々だった。

第四章

「誰だつてそうでしょ？心のこもっていないプレゼントなんかいら
ないわよ」

「姉ちゃんもそうなの？」

「そうよ。そりゃ私だつてね」

次第に本音を出してきていた。話が進むにつれて素顔が見えてき
ている。これは金のせいか話をしているうちに出て来ているのかそ
れはわからない。

「高いものとかいいものは欲しいわよ」

「うん」

「それでもよ」

また新しい缶を空けたのだった。

「心がなかったら。そんなのもらっても何ともないわ」

「何ともないの」

「阿呆らしいわよ」

こうまで言うのだった。言いながらその細い眉を顰めさせている。
どうやら過去にそうしたことがあったらしい。悠樹はその声と顰め
させられた眉からそれを感じ取っていたがやはりそれを言うことは
なかった。

「そんなの貰つてもね」

「そういうものなんだ」

「あんただつてそうでしょ」

今度は彼に話を振ってきた。

「あんただつて。心のこもったプレゼントがいいでしょう？」

「うん、それはね」

これについては彼も全く同意だった。

「勿論だよ。やっぱりそれはね」

「そうでしょ？そこんとこ考えてみるのね」

また言ってきた。

「よくね。お姉さんが言えるのはこれだけ」

「これだけって？」

「まだ言って欲しいの？」

相変わらずビールを飲んでゲーム画面に顔を向けながら彼に問うた。

「まだ。よかったら言ってあげるけれど」

「うん、もういいよ」

彼にしてももうこれで満足なのだった。とりあえず聞きたいことは聞き終えたと思った。

「もうね。それじゃあ今日はね」

「これでいいのね」

「うん、有り難う」

あらためて礼を述べたのだった。

「とりあえず何となくわかったかな」

「お金の問題じゃないのよ」

「うん」

「要は心」

奈々はとにかくこのことを強調するのだった。

「覚えておくことよ。いいわね」

「うん、わかったよ」

彼はその言葉に確かに頷いた。

「それだね」

「あとは」

ここでまた言ってきた従姉だった。

「簡単に考えたらいいわ」

「簡単に！？」

「そう、簡単にね」

今度は簡単にといふのである。

「考えていけばいいわ。じゃあ早く自分の部屋に戻って勉強でもゲ

ームでも好きなことをしたらいいわ」

「じゃあそうさせてもらうよ」

悠樹も従姉にこう返した。

「今からね」

「今日の講義はここまで」

強引に打ち切った感があるが奈々にとっても悠樹にとってもここまでで充分であった。

「後はゲーム三昧でいくから」

「ビールもでしょ」

「ビールは水よ」

ビールについても随分と強引であった。

「言っておくけれどね」

「そうなんだ。まあとにかくね」

「ええ」

「わかったよ。じゃあ部屋に行くから」

彼もこれで自分の部屋に向かった。奈々は相変わらずビールを片手にゲームをやっていた。何はともあれ彼はある程度だかわかった。何が大事なのかを。

誕生日は近付いていた。彼はある程度だが何をプレゼントするのか決めていた。それを何にしようかという。とりあえず心のこもったものというと思っていたものがあつた。

「これだろうな、やっぱり」

彼は軽音楽部である。その部室で今曲を作っていた。作詞も作曲も彼がやっている。彼は本来作曲がメインで作詞はやらない。しかし今回は特別だった。

「随分根詰めてるな」

「作詞もかよ」

「うん」

周りの部員達に対して応える。部室で楽譜を前にしてギターを持っている。そのうえであれこれと楽譜を書いたりギターを鳴らした

りして曲を作っている。

その彼に対して周りが言ってきたいるのだ。その彼の頑張りに対して。彼も微笑んでそれに応えていた。

「ちよつと今回はね」

「御前が作詞するなんて珍しいな」

「ラブソングなのはいつも通りだけれどな」

彼が作曲するのは大抵ラブソングの為だ。歌のジャンルはバラードが多い。彼はバラードが一番得意でそれを作曲することが多いのである。

第五章

今回も曲はバラードだ。そして作詞も彼だ。あれこれと考えながら曲を作っていた。

「はじめてだけれどね」

「そういやはじめてだったな」

「うん」

また周りの部員達に答える。

「そうだけれどね」

「作詞はじめてだったのかよ」

「それでも結構やるな」

部員達は彼が詞を書いていつているのを見てコメントした。

「つていうか本当にはじめてか？」

「何かいい詞じゃね？」

「だよな」

皆今彼が作っている詞を見て言う。

「上手い感じになっているな」

「上手だな」

また言う彼等だった。

「このままいけばかなりな」

「ああ、名曲ができるな」

「うちの部で今年一番だよな」

「そうだよな」

皆で言い合う。彼の作詞を素直に認めていた。

しかし当の悠樹は浮かない顔をしている。その顔で脇目も振らず曲を作っている。周りの部員達の顔すら見ようとはしないのだった。

「まだ駄目かな」

「駄目か？」

「いけるよな」

「なあ」

彼等の目ではそうなのだった。

「このままいったらな」

「まずどこるか確実に大丈夫だろ」

「いけるって」

「やっぱり駄目だよ」

しかし彼は首を横に振って言った。

「これじゃあね。まだ駄目だよ」

「駄目か？」

「まあ作ってるのは御前だからな」

「納得しないのだったらいいけれどな」

周りは彼の言葉を聞いて納得はしないがそれでも認めるしかなかった。彼等の誰も今回の作詞作曲に関わっていないからこれは仕方がなかった。

「とにかくだよ。あまり根詰めるなよ」

「身体に悪いからな」

「わかってるよ」

一応口ではこう答えはする。

「それはね。けれど今の曲じゃ駄目だ」

「やりなおしかよ」

「それでかよ」

皆彼の言葉に釈然としないながらも止めることはできなかった。

「御前が納得するようにしたらいいさ」

「いい曲作れよ」

「うん」

こうして曲を作っていく。何度も何度もやり直し誕生日の前日の夜遅くになって。遂に曲ができたのだった。彼女の為の曲が。

「できた……」

自宅の自分の部屋だった。その部屋の中で彼は完成した楽譜とその詞を見て言った。暗い部屋の中で机の灯りだけを点けその中で会

心の笑みを浮かべていた。

「これで。遂に」

「ねえ悠樹君」

ここで部屋の扉の向こうからあの奈々の声が聞こえてきた。

「まだ起きてるんでしょ。いい？」

「いいつてもう十二時だけれど」

「まだ十二時よ」

こう来た。

「十二時じゃない。夜はこれからよ」

「これからって明日学校なんだけれど」

たまりかねた声で従姉に言い返した。

「私もよ」

「じゃあ早く寝たら？」

「学校が怖くて飲めないわよ」

これまた随分バンカラな言葉であった。傾いていると言ってもいい。

「そんなの朝走ってね。一気に抜くのよ」

「お酒を？」

「そうよ。だから飲むわよ」

「今日はいいよ」

彼はこう言って断る。

「今日はね。もういいよ」

「何よ、つれないわね」

従弟の言葉に扉の向こうで憮然とした声を出す。

「わかったわよ。もう寝るわよ」

「うん、そうしたらいいよ」

そのつれない声を従姉に返した。

「じゃあね。僕は寝るから」

「もう今日は誘わないから」

今日は、と限定するのが彼女だった。

「じゃあね。子供は早く寝なさい」

「姉ちゃんもね」

悠樹もさらに言い返す。

第六章

「早く寝たらいいよ。じゃあね」

「ええ、またね」

こうして悠樹の中では話が終わった。しかし奈々はまだ扉のところにいた。そうしてふとした感じで言うのだった。

「まあ頑張るのね」

これが自分に向けてのものとは悠樹は知らなかった。知る以前にこの言葉を聞いてもいなかった。こうして真夜の誕生日となった。その日の放課後彼は彼女と二人になるとまずあの楽譜を差し出したのだった。

「あのさ、これ」

「曲なのね」

「うん。何がいいかなって思ったけれど」

戸惑い顔を真っ赤にしながら話すのだった。

「これにしようって思って」

「音楽なの」

「真夜ちゃんのこと書いたんだ」

こう真夜に述べる。

「よかったら。受け取って」

「ええ」

まずはその曲を受け取る真夜だった。受け取ったうえでその大人びた顔を微笑ませる。

「有り難う」

「うん」

「この曲、有り難く受け取らせてもらっわ」

楽譜をその両手で抱き締めながらの言葉だった。

「私の為に作ってくれた曲だから」

「ギターでも弾けるから。聴く？」

「勿論よ。けれど」

ここで真夜は話を少し変えてきた。

「もう一つ欲しいわ」

「もう一つって？」

「悠樹君の心。受け取ったわ」

その曲にあるのだと。言葉の中に言っていた。

「それでね。今度はね」

「今度は？」

「まずは。これは」

楽譜は丁寧に折り畳み自分の鞆から取り出したファイルに入れた。そのうえで鞆の中に入れてあらためて悠樹に対して言ってきた。

「こうして」

「それで。何が欲しいの？」

「私からのお礼でもあるけれど」

言いながらそつと前に出て来た。そして。

彼を抱き締めたのだった。その両手でそつと。これは彼にとっては思いも寄らないことだった。

「えっ……」

「抱き締めて欲しいの」

悠樹を抱き締めながら囁いてきた。

「こっというふうに。私も」

「真夜ちゃんも」

「ええ。抱き締めて」

また悠樹に言ってきた。

「どうか。御願い」

「抱き締めて欲しいの」

「心は温もりよ」

真夜の言葉だった。

「だからね。抱き締めて」

「それが欲しいの」

「ええ」

悠樹の言葉に対して答える。

「御願い。私にも」

「だったら」

悠樹は真夜のその心を受け取った。そうして。

抱き締めたのだった。彼女を。二人で抱き締め合う形となった。その中で彼はまた真夜に言ってきた。

「これで。いいんだよね」

「ええ。これで満足」

真夜の声が笑っていた。

「これでね。もう何もいらないわ」

「満足してくれたんだね」

「どんな高いものも立派なものもないの」

これは奇しくも奈々が言った言葉だった。

「けれど。心が欲しかったから」

「僕の心が」

「それが貰えたから。もういいわ」

満足しているというのだ。

「これでね。有り難う」

「真夜ちゃん……」

「悠樹君のお誕生日にも」

今度は真夜が言う。

「こうしていたいわ。いえ」

「いえ？」

「ずっと」

誕生日だけではないというのだった。

「ずっとこうしていたいわ。それは駄目かしら」

「いいよ」

悠樹は温かく真夜のこの願いを受け入れた。

「ずっとね。こうして二人でね」

「ええ。ずっとね」

「二人で何時までも」

夕暮れのあの土手のところで二人抱き合いながら話すのだった。

真夜も悠樹もお互いの暖かい心を受け取った。その温かい中で心を交えさせ合わせていた。

優しく抱いて

完

2009・3・31

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0573h/>

優しく抱いて

2010年10月8日15時28分発行